# ドーデー『最後の授業(La dernière classe)』をめぐる諸問題

砂 原 教 男

『最期の授業』はドーデの短編集『月曜物語（Comtes du Lundi)』の冒頭に置かれた有名な話である。ドーデは1871年7月から1872年3月まではパリの新聞『ソワール』に、4月からは新聞『レヴェンヌマン』ついで『ビアン・ピュブリック』と移って月曜日ごとに短編を掲載し、1873年3月に連載を終えると、単行本として刊行している。

この『最後の授業（La dernière classe)』は1872年5月13日（月曜日）『レヴェヌマン』紙上に掲載された。1872年の普仏戦争で敗れて、ドイツに割譲されるアルザスを舞台にした物語である。アメル先生は「フランス語は世界中でもっとも美しく、いちばん明快で、いちばん力強い言葉である。ある民族が奴隷になっても、その国語を保っているかぎりは、その牢獄の鍵を握っているような物だから、フランス語をよく守って決して忘れないように」と子供達にとき、『フランス万歳』と黒板に書いて去ってゆく、というのがあらすじである。色々の問題をはらむ短編だが、さすがドーデだけあって、実にうまく作られていて、筆者も数十年前にフランス語を学んだときに読んで感銘を受けたことを覚えている。

僕たち戦中派はこの物語を教科書では習っていないが、戦後は、ほとんどの人が国語の教科書で学んでいたようである。ところが現在の教科書からは完全に消え去っているそうである。これほどの名作が完全に教科書から消え去ったのは何故だろうか。

この短編の舞台になったアルザス（Alsace）から見てゆこう。アルザスはライン河左岸、すなわちフランス東部のライン河西岸地域にある。現在はオー・ラン（Haut-Rhin）県、バ・ラン県（Bas-Rhin）に分けられている。このア

ルザスに接し、ロレーヌがあるが、ロレーヌはモーゼル（Moselle）県をなしている。このアルザスは気候穏和で、葡萄酒は有名であるが、土地は肥沃であるので、穀物の生産が多い。さらに鉄、石炭の生産高はヨーロッパ随一であるがゆえに古くから独・仏の争奪の地になった。

平凡社の世界大百科事典によると、面積14,520平方キロ、人口オー・ラン県58万5千人、バ・ラン県82万千人となっている。別の統計によると、1910年現在アルザスー・ローレヌ住民の87%がドイツ語、11%がフランス語であり、宗教でみるなら新教徒は22%、カトリック教徒は76%、わずかのイスラム教徒となっている。新教國ドイツ、カトリック國フランスと比べるとやはりその宗教状況は複雑である言わざるをえない。

アルザスの歴史は1648年を区切りとして二分される。前の10世紀間が神聖ローマ帝国、すなわちドイツの枠内で経過した。後の3世紀間はフランス領である。但しフランス時代の終わり頃、アルザスは2度ドイツ領になる。すなわち1870年にはドイツ帝国、1918年にはフランス、1940年にはまたナチス・ドイツ、1945年にはフランスになったので、結局4度国名および制度の変更を蒙ったことになる。

少しく歴史をさかのぼってみると、久しくケルト族が居住していた。その後ゲルマン族が前1世紀まで居住していたが、BC58カエサルにうち負かされてローマ領になった。ローマ軍の野営地は多分現在のストラスブールだったらしい。ついでアレマン族が侵入して、ローマ人やフランク族と衝突したが、496年のトルビアック（場所不明。多分アルザス）の決戦で、フランク族が勝利している。この結果、フランク族はアルザス北部に定着し、アレマン族は南へ追われる。496年クロヴィスによってフランク王国が樹立されると、この地方もこの王国の支配下に入った。だが、640年頃アルザス公國になってはじめて政治的統一体が形成された。宗教的にはストラスブール司教の支配下に置かれている。

ヴェルダン条約（843）でフランク王国は3子に分割相続された。この条約では相続人3人の分配の均等という見地から、言語状況（当時もう既に共通のフランク語から東方は古ゲルマン語、西方はロマン語に移行していた—— fe

ストラスブルグの誓い（842）はこの両方の言葉で書かれている——）を無視して、東部ではライン河、西部ではエスコー川、マース川、ソーヌ川、ローヌ河という自然国境に頼って境界線を引いた。この結果生まれた真ん中の長細い国家を長男ロタール（Lothar、ここからLotharingiaの名がおこる）が相続し、北はアーヘン、南はローマと2つの首府が置かれた。

メルセン条約（870）では、この長細い中王国のうち、イタリアを独立させて、ロタリンギアを東西に分割してそれぞれ西王国、東王国に併合させた。

東王国ではカロリング王朝は911年に、西王国でも987年に断絶した。東王国は7年間の暫定的な王を経てザクセン王朝（919－1024）が成立したが、西王国ではノルマンの侵入の阻止に活躍したカペー家が王に選ばれた。この王朝の交代の混乱に乗じて、まず西王国が911年ロタリンギアを併合した。だが、ザクセン王朝のハインリッヒⅠ（919－936）は925年ロタリンギアを奪還して東王国のものにした。

アルザスは962年神聖ローマ帝国の成立によって帝国に組み込まれたが、ロレーヌは事実上の独立公国になって別の道を歩みはじめた。ホーヘンシュタウフェン王朝期（1138－1254）にはアルザス文化が開花した。南フランスのトルバトーレ（troubadour）の影響でミンネザンク（Minnesang）が、まず、アルザスで生まれている。またアルザスの中心ストラスブール（1262年司教支配から離脱している）とコルマール（Colmar）はドイツ第一級の文学、絵画、建築を生んでいる。ランツベルクのヘラッデ（Herrrade von Landsberg）の『悦楽の園』、グリヒェツェーレのハインリッヒ（Heinrich der Glichezaere）の『ライネケきつね（Reineke Fuchs)』、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（Gottfried von Strassburg）の『トリスタンとイゾルデ（Tristan und Isorde)』はいずれもアルザスで書かれており、当時のドイツを代表する作品である。あの神秘主義者ヨハネス・タウラー（Johannes Tauler）はここアルザスで中世を突き崩す深遠な理論を組み立てていた。壮麗なストラスブール大聖堂の建設は12世紀には始められている。

このような各方面での文化の発展は結局17世紀まで続き、アルザスはルネサンスの中心地の一つになった。グーテンベルク（Gutenberg）の印刷術がアル

ザスで発明された（c1450）頃、風刺詩集『阿呆船（das Narrenschiff)』を著したセバスティアン・ブラント（Sebastian Brant）や彼の友人で阿呆船のテーマを説教にとりいれた説教師ガイラー・フォン・カイザーベルク（Geiler von Kaysersberg)、『ゲルマニア（Germania)』を書いた神学者ヤーコプ・ヴィンフェリング（Jacob Wimpheling）など多くの人文主義者たちを生んだ。

宗教改革はストラスブールの重要性を増す。ここではマルティン・ブーツェル（Martin Butzer）によって宗教改革が行われたが、交通の要衝でもあるので、プロテスタント世界の外交上の首都の役割を果たしていた。ストラスブールのギムナジウムの長として教育史上に大きな足跡を残し、ジュネーヴから追放されたジャン・カルヴァン（Jean Calvin）に大きな影響を与えたヨハン・シュトルム（Johannes Sturm）などが活躍したのもここストラスブールである。

16世紀以来フランス王ルイ14世がロレーヌ奪回に積極的になり、30年戦争後のウェストファリア条約（1648）ではストラスブールを除くアルザスをフランスに併合した。このストラスブールは1681年、橋の通行権の保持、新教派大学の維持を条件に仏王権に降伏、フランスに併合された。しかし大革命までフランス語は殆ど浸透せず大学・学校、行政官庁、下級裁判所ではドイツ語が使用されていた。

しかし、フランス革命以後アルザス・ロレーヌの住民はフランスへの傾斜を急速に強めていった（1,000年間にわたるゲルマン的伝統と同じ程度の深い刻印をアルザスに与えるのに、フランスはたかだか200年で事足りた！)。フランス革命では農奴の解放、農地の取得、市民としての待遇がフランス本国と同じように行われた。ここでは、ドイツ的なものは封建的なものとして壊された。またストラスブールではラ・マルセイエーズが作られている。ラ・マルセイエーズはストラスブールのライン駐屯隊の軍歌として、その将校クロワード・ジョセフ・ルージェ・ド・リールによって1792年4月25日作曲され、1795年7月14日国歌として認定されている。かくて、フランス革命の過程で、ここはフランス革命の諸シンボルと結合してナショナリズムが高まり、フランス国家への忠誠が誓われるようになった。

したがって、この地域のドイツ化は「フランス革命に対する復讐」という性格を持たざるをえない。だから、普仏戦争（1870－1871）で勝利し、こともあろうにうち負かしたフランスの象徴ともいうべきヴェルサイユ宮殿の「鏡の間」で成立式典を行った「ドイツ帝国」はフランクフルト講和会議（1871年5月）で、アルザスを獲得した。これは宰相ビスマルクが主張したと言われているが、実はここはパリ攻撃の際、絶好の前進基地になるという全くの軍事的理由から軍部が主張したと言うことのようである。

講和会議の結果、フランスはアルザス全部とロレーヌの東半分を割譲したうえに、50億フランスの償金を課せられた（ドーデがパリの新聞『レヴェヌマン』に「最期の授業」を掲載したのはこれの丁度1年後)。この負担を軽くするために、政府は1872年7月、30億フランの公債を募集したが、この2州の喪失を国民的屈辱と感じた市民達が殺到した。結局応募者は約14倍に達した。異常な愛国心の高揚が見られた。

なぜこの頃愛国心の高揚がみられるようになったか？

普仏戦争まではアルザス・ロレーヌは独仏間でそれほど問題にならなかった。それが問題と意識されるようになったのは次のような事情があったと考えられる。

17、18世紀の絶対主義時代のヨーロッパでは、フランスの武力（陸軍力）は優越した存在であった。ナポレオン戦争期でもフランスはプロイセンを脅威には感じなかった筈である。

ところが、普仏戦争で、フランスは国内の反体制派を抑えきれず共和制（第3）に向かっていった。これに対し、ドイツではプロイセンを中心にドイツ帝国を設立して、産業の発展を押し進め、ビスマルクの「鉄血政策」で資本主義的発展の道に突進むという対照的方向に進んだ。事実この戦争を境に、ドイツは人口においてもフランスを凌駕し、フランスの目にはドイツは脅威と映るに至った。だからフランスでは殊更ドイツに対する復讐（revanche）が声たかく叫ばれた。たとえば、パリ・コンコルド広場のストラスブールの女神像には一日も欠かさず哀悼の花がささげられた。また、1870年から1882年までに「ア

ルザス」という表題をもつ出版物の総数は約2,000にのぼるが，そのなかでもっとも有名で長期にわたって人気を博したのが『最期の授業』であった。

アルザス・ロレーヌ両州を併合したドイツ帝国は、この地方を軍部の軍事的占領下におき、住民の自治を認めなかった。ビスマルクはただ軍事的な見地から、帝国の西部国境の安定、ドイツの安全のみを図っただけであった。だからこの両州の住民たちは帝国の統治には敵意と不信を抱いただけであった。

最初ドイツ政府は住民にフランス国籍かドイツ国籍の選択を求めた。1872年10月１日現在でフランス国籍を求めた者164,633人であったが、出国を強要されると、実際にフランスに出たものは５万人余であった。このあまりのせっかちさなドイツ化政策はいたづらに住民の反発をかうだけであった。妥協として1911年ドイツ帝国政府は部分的自治を認め、アルザス・ロレーヌを邦（Land）に昇格させ、邦憲法が制定された。しかしアルザス・ロレーヌは完全に独立した邦とは認められず、邦議会の可決した法律も皇帝の拒否権の下に置かれた。

1914年の第一次大戦はアルザス問題の矛盾をアルザス人たちに突きつけた。１万８千人のアルザス・ロレーヌ人がドイツを去ってフランス軍に加わり、22万のアルザス・ロレーヌ人がドイツ軍に動員された。しかしアルザス人はドイツからは「フランス野郎」、フランスからは「プロイセン人」と見られ、いずれの軍からも信用されなかった。だから、仏領赤道アフリカ・ガボンで医療活動をおこなっていたアルベルト・シュバイツアー（彼はドイツ統治時代にカイザーベルク（Kaisersberg）に生まれ、ストラスブール大学で哲学と神学を学んだ神学およびバッハ研究の権威。しかし、1905年から医学を学んでフランス植民地ガボンで原住民の診療に当たっていた。）は1917年９月フランスによって捕虜として逮捕・収容されている。さらに戦争開始とともに、3,000～4,000のアルザス人が逮捕、拘禁、追放されているし、新聞の検閲も開始された。

しかし、戦争末期ぎりぎりの1918年10月、ドイツ帝国最期の首相マックス・フォン・バーデンはアルザス・ロレーヌの自治を認めた。しかしあまりに遅すぎた。自治の機構も権威も備わらないのに、終戦（1918－11）を迎え、ドイツ帝国は崩壊し、アルザス・ロレーヌはフランスに戻った。

1918年11月のフランス軍のアルザス進攻は、住民を狂乱狂喜させる。もとも

と、アルザスは軍隊の宿営地に使われた。アルザスの平原、ヴォージュの山々には、フランスのどの地方よりも多数の城塞がある。ここには、フランスか外国かのいずれかの兵士を匿わなかった家はない。相次いだ戦争で、略奪、爆撃、廃墟のないアルザスの都市はない。ここでは異人種の血が常に混入した。かくて家族の分断、相戦う家族、脱走兵を受けいれる家族、追い返す父親などの悲劇は枚挙にいとまがなかった。

戦後には種々の特別裁判所が設置された（敵軍協力者裁判所、人種判別裁判所、特別公民裁判所など)。1870年出生のアルザス人は5回も国籍を変更させられている。

さらなる悲劇は1940年からのナチスによる占領である。ナチス・ドイツはゲルマンの「血」の神話を作り上げて、アルザス人を対フランス戦争に駆り立てた。一方では反ナチ抵抗運動で14万人ものアルザス人が強制収容所に送られ,ており、4万人が兵役を拒否してフランスに逃亡（家族を含めると14万5千人）している。

1945年、「血」と「言葉」を共有するドイツ人から解放された時、アルザス人は自分の「血」と「言葉」を憎んだ。「血」を消すために命を絶つ者、「血」を薄めるためにフランス内地人とだけ結婚しようとする者、「血」をかくす為に、忌まわしい「血」の証である名を変える者が出た。かくて1968年頃、アルザス語は事実上瀕死状態であった。

このアルザス人の血のにじむようなコンプレックスに一層拍車をかけたのがフランスの文化・言語政策であった。小学校はもちろん高等教育機関でもドイツ語の使用は禁止された。新聞もスポーツ欄、子供向け記事はフランス語だけであった。官庁用語はフランス語だけであった。「ナチス時代のマイナスを取り戻すため」のこのような茶番劇は事態を絶望的にしただけであった。

アルザスの言語状況を概観しておこう。前述のように、アルザスには紀元5世紀頃よりゲルマン系の2種族、すなわちフランク人とアレマン人が定住した。フランク人はモーゼル川とザール川とアグノー（ドイツ語でハーゲナウ)、ヴィサンブール（ヴァイセンブルク）を中心とする地域に、またアレマン人はライン左岸スイス国境までの地域に住んでいる。今日のロレーヌ県とバ・ラン

（Bas-Rhin）県北部がこのフランク人の言語＝ライン・フランク語が喋られていた地域であった。一方オー・ラン（Haut-Rhin）県がアレマン人の言語＝アレマン語が話されている地域であった。

このライン・フランク語はフランスのドイツ語系ロレーヌのモーゼル（Moselle）県、ドイツのラインラント・プファルツ州、ルクセンブルク、ベルギーで話され、アレマン語は　ドイツのバーデン地方、バーデン・ヴュルテンベルク州、アルゴイ地方、スイスのドイツ語圏、リヒテンシュタイン公国、オーストリアのフォアアールベルク州で話されている。

普通バ・ラン県とオー・ラン県をまとめてアルザスと呼ぶが、この地方に住む約150万人のフランス国民の約70%は方言が理解でき、話せる。そのうち約95%がアレマン語、5%がフランク語を話しているそうである。

フランク語やアレマン語をひとまとめにしてアルザス語といったり、あるいは単にフランス語に対して「方言」と呼んだりしているので、少々ややこしい。しかもこの「アルザス語」はアルザスの北から南まで同じ原語でないからますますややこしい。が少なくとも、フランス語とは根本的に異質の原語で、フランス語がラテン語の言語体系であるのに対して、アルザス語は高地ドイツ語（これがドイツの標準原語、だから標準ドイツ語）の言語体系に属している。

彼らは19世紀初めからはフランスの初等義務教育をうけていて、ほとんどすべての住民はフランス語も話せる二重言語使用者である。

1980年の統計調査ではアルザス全域でアルザス語を母語とする者は72%、フランス語を母語とする者22%となっている。（この数字には地域差がある。農村部がアルザス語をよく残し、都会ではその比率は低い）。

この地域にはフランス語、ドイツ語、ドイツ語の方言であるアルザス語あるいはアレマン語の3つの言語が相互に重なりあっている。 アルザス語は日常語（Umgangssprache）として使われている。しかもアレマン語は3世紀以来1,700年間、ライン・フランク語は5世紀以来1,500年間話されてきた。それはドイツ語がドイツに普及し始めるよりも1,000年前、フランス語がアルザスに入るよりも1,200年前である。

アルザス人の80－90%が公的生活でフランス語を話し、アルザス語は住民の

3分の2が話せる。ドイツ語は住民の50－60％が話せる。しかし書き言葉である標準ドイツ語は目に見えて使われなくなってきているのが現状である。

彼らの方言はアルザスの特異な個性の根幹をなし、アルザス人の固有な精神をはぐくみ、その伝統と文化を形成してきた。彼らは自らの存在が危機的状況に陥るとつねに方言に頼った。方言こそ彼らの存在のより所であった。その証拠にアルザスには方言で書かれた豊かな文学（方言劇、方言詩）が18世紀末頃からあり、連綿として受け継がれてきている。

そこで、1968年の5月革命の時、ストラスブール大学教授ガブリエルを中心にルネ・シッケレ協会（Cercle René Schickele）が設立され、季刊の会報“Land un Sproch, Les Cahiers du Bilinguisme”をだして、アルザスとモーゼル県の二重言語の使用を旗印に活躍している。最初は公安当局ににらまれたが、現在は会員約2,000名で、事務局はストラスブールにおかれている。協会の名称であるルネ・シッケレはアルザス生まれの二言語使用者であった作家René Schickele（1883－1940）からとられており、学校教育で標準ドイツ語の授業を復活させるのに成功している。

南仏で生まれたドーデー（1870－97）は、普仏戦争で愛国的本能が呼び覚まされ、パリ防衛のための国防軍に参加し、その経験をもとにパリで『月曜物語』を執筆した。これはパリの読者を相手に、フランス語で書かれた。それはその頃急速に台頭してきた反プロシアへの大きな流れのなかで大成功を収めた。

彼は南仏語を母語として育ち、当然親友フレデリック・ミストラル（1830－1914）の南仏語文学運動を知っていたはずであるし、その運動の中でアルザスの現状も熟知していたのではないだろうか。その彼が、授業の最期にアメル先生に言わせた言葉『ある民族が奴隷となっても、その国語を保っているかぎりは、その牢獄の鍵を握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って、決して忘れてはならない』(p.16）という言葉は、ミストラルの言葉を典拠としている。（フランス語版にはミストラルの次のような言葉が欄外の注として加えられている。

S'il tient sa langue, il tient la clé qui, des ses chaînes, le délivre

ミストラルはフランス国家語の強圧に抗して、カタロニア語やブルトン語などとの連帯を意識しつつ南仏語（オクシタン語――ラテン語から派生したフランス語やイタリア語、ポルトガル語ときわめて近い言語で、フランス全土の三分の一で使用されていた）を守るという決意を、この言葉で表明したわけである。だから、この「牢獄の鍵」発言はアルザス人がアルザス方言を守り、育てようとする運動を鼓舞するためにこそ用いられるべき言葉である。ドーデーはこれを逆用して、アルザス語を使用しているアルザス人にむかってフランス国家語の使用を説教して、パリに住む読者に受ける形にねじ曲げている。

当時のアルザスの言語状況から考えて、1871年ではアルザス人の母語はまだしっかりと根付いていて、フランツ君の母語はドイツ語系のライン・フランク語であったし、多分アメル先生自身の母語もそうであったろう。そうすると、ミストラルの「牢獄の鍵」論は、フランス語についてでなく、フランツ君の母語アルザス語にこそ当てはまる。「アルザス語を守っている限り、自己解放の鍵を握っていることになる」、と使われるべきだろう。とすると、ドーデはアルザスの現状を無視して、彼らの母語を勝手にフランス国家語にしてしまって、国家語の使用を説き、ドイツへの敵愾心を燃やし続けるためのプロパガンダとして友人ミストラルの言葉を悪用したことになる。

このような状況を背景に、日本での「最期の授業」の問題を見てゆこう。このドーデの作品を最初に日本に紹介したのは森鷗外で、ドイツ語からの重訳で『緑葉嘆』という題で読売新聞に載っている（1889年、明治22年）。次は1902年（明治35年）「新小説」３月号に「をさな心」という題で紅葉山人（尾崎紅葉）と羝　夢生の二人が、英文からの重訳という形で行っている。３番目は1904年（明治37年）５月８日の読売新聞に、片上　伸が『最終のお稽古』という題でのせている。

『月曜物語』全体は1936年（昭和11年）桜田佐訳が岩波文庫に取り入れられている。これは名訳のほまれ高く、1959年（昭和34年）新字、新かなに訂正され、22刷で改版され、現在も版を重ねている。

国語教科書への採用は1927年（昭和２年）三省堂の中学校教科書『新撰国文

読本』が最初である。そこでは「フランス萬歳」の表題で収録されている。本稿との関連で注目すべき点は、後でも触れるが、原文で「今あのドイツ人たちにこう言われても仕方ありません。どうしたんだ、君たちはフランス人だと言い張っていた。それなのに自分の言葉を話すことも書くこともできないのか！」の下線部分が「フランス語が書けもしないのに」と改変されていることである。田中克彦教授の指摘を待つまでもなく、自分の母語、アルザス語を話せないなんてことは考えられないので、編者がその辺のことを考えて書き改めたものと考えられるだろう。府川源一郎教授は「これほどきちんと前後を見通して改作した教材文は、戦後の教材を含めて、これ以降には存在しない」（p.81）と指摘しておられる。

1927年に出版された『最新女子国文』（寶文館）以降、戦時体制が強まって、文部省が「中学校教授要目」の改訂まで 4 種類の教科書があるが、そこでは原題の「最期の授業」を採用している。1941年（昭和16）からは一切の外国の素材や外国の人物は登場しなくなった。いや、教科書すらも消えてしまった。

戦後は、1952年（昭和27年）光村図書『中等新国語』、学校図書『中等国語（言語編）』に登場している。それ以来、12社25種類の教科書に採用され、延掲載年数（掲載年数に掲載されている教科書の種類数をかけあわせたもの）で見ると 8 番目とのことである（この統計は昭和24年から61年度までであるが、「最期の授業」は1972年（昭和47年）で中学校教科書から姿を消しているので、掲載されていた約20年間の人気度はもっと高かったと言うべきだろう。）（府川、p.134）

小学校では登場はやや遅く1956年（昭和31年）からであるが、その内容は原文とは大分離れて、原文では黒板にフランス万歳と書いて終わるのに、小学校の教科書では、例えば全員起立してフランス国家を歌って、その声は遠く村の空に流れていきました、とかえてある。

1971年（昭和46）以降は小学校の 6 割以上、1977年（昭和52）から1979年（昭和54）までは小学生の90％近くがこの話を教科書で読んだことになっている。だが、中学校教科書からは1972年（昭和47年）に、小学校教科書からは1985年（昭和54年）に消えた。なぜ消えたのだろうか。

そのためには、戦後の教科書での『最期の授業』の扱われ方を見ておく方が良いだろう。

戦後の授業の特徴は教科書はそれを正確に、まるごと理解しなければならない聖典ではなく――、学習者が自分の問題意識を広げたり、知識を求めたりするための材料集という性格を持つことになった。そこで、その学習の目当てを明確にしなければならないとして『単元（unit)』という概念が導入された。だから、その教材はどういう単元のなかに位置づけられているかが問題になる。

『最期の授業』は14教科書中「文学作品」の単元で扱われたのは7教科書、「国語愛」という単元で扱われたのは5教科書となっている。本稿に関係するのは勿論「国語愛」の単元である。そのなかの2教科書のみを見ておくと、愛育社版『中学国語』では「国語の愛護と改良」という単元で「最期の授業」、「国語の改良」、「国語のなりたち」「わかりよいことばで」「国語と国民性」、「話しても書いても」の6教材が配されている。この単元の冒頭には、この単元の意図として「一国の歴史はその国のことば――国語によって伝えられ、国民は国語によって堅く結ばれる。まことに国語とは縦に横に國を結ぶ帯である。……」となかな格調の高い文章がある。

もう一つ光村図書の「総合中等新国語」は「ことばをみがく」という単元で、「方言と共通語にふれた作文と、……日常の言葉を反省した随筆」と一緒に構成されている。「ことばをみがく」で共通語の必要性がコミュニケーションの円滑化の促進という観点から述べられている。とすると『最後の授業』の位置づけは大体想像できる。

1975年雑誌「言語生活」に蓮実重彦教授は「日本語論から言語的実践へ」を書き、「アルザスで伝統的に話され、現在も日常的に流通しているのは、一般にアルザス語と呼ばれるドイツ語系の方言であり、世界的な少数民族擁護の運動と相呼応しつつ言語学者が口にしはじめた地方語（langue régionales）の一つである」とアルザス語の置かれている言語状況を明確にした上で、（アメル先生が生徒にフランス語を守れととくことは）アメル先生は「アルザス人に他人の言葉を、国語として強制する加害者」になっていると批判して、この問

題の本質を厳しく糾弾している。

これに対して、教科書を出版している光村出版社は、1980年度に改訂された教科書に、次のような解説を付け加えることですまそうとした。

「アルザスの人たちは、もとはほとんどドイツ人でしたが、国民を無視して独断で行うドイツ（当時はプロシア）の政治から心が離れていました。ひとびとはフランスの言葉や制度を支持するようになり、フランス国民として生活していました。フランス語を自分たちの言葉として勉強していたのです。丁度そんなとき、両国の間で戦争が始まり、フランスが敗れて、アルザス・ロレーヌはドイツの領土になりました。この作品は、その直後の物語です。ドイツ人でありながら、フランス人でありたい、ドイツに戻りたくないというアメル先生をはじめアルザスの人々のことを、作者はフランツの目を通して描いています。こういう時代の作品だということに気をつけて読んで見ましょう」。

この結果アメル先生はドイツ人でありながら、フランス国家を崇敬する人物になり、アルザス人は日常語としてはドイツ語を使いながら、日常語でないフランス語を主体的に選択し、それを勉強していることになる。何とも奇妙なことである。

これに決定的な「断罪」をあたえたのは田中克彦教授の『ことばと国家』（岩波新書1981年）である。教授は、まづ言語は抽象的なもので、真に話せる言葉は「方言」であり、国家が作る標準語との間には価値の優劣はない、とし、方言は「話される」ものであり、文字で書くことは、二次的に付け加わったに過ぎない。その方言とは母の胸で聞いた「母語」である。と明快に規定している。

だのに、「ドーデのこの短編は、日本では「国語愛」を説くための伝統的な教材に仕立て上げられているが、その歴史的背景を考えてみると、これほど問題を含む作品はない。…永年の言語弾圧にも関わらず、いまなお70%がドイツ語（あるいはアルザス語）を母語とする住民において、「母国語」としてのフランス語を「死んでも奪われまいと決意する」のは、どう考えても奇妙な、つじつまのあわない話である。その決意ができるのはアメル先生だけである」（p.50－52）と実に正確に事態を指摘した。

さらに、田中教授は続ける。「奇妙なことは、「最期の授業」はまさに日本のアジア侵略のさなかに「国語愛」の昂揚のための格好の教材に用いられたということだ。その国語愛の宣揚者たちは、たとえば朝鮮人の「国語愛」には思いもよらなかったのである。しかしこの奇妙さは、言語的背景であるアルザスに朝鮮を、フランスに日本を入れかえれば一挙に消え去るのである。

日本のアメル先生にとって、朝鮮は皇民であったのだから。このように考えをすすめていくと、「最期の授業」の母国愛がどのような性質のものであるかがありありと姿をあらわしてくるであろう。背景をよく考えてみると「最期の授業」は、言語的支配の独善をさらけ出した、文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一編でしかない。」(p.127)

母語を奪いつつ母語を大事にせよと説くアメル先生の滑稽な役割は明快にえぐり出され、物語の矛盾はいかなる弁解も覆い隠せなくなってしまった。

かくて、この時点で三社が採用していた「最期の授業」は1986年度版の国語教科書から姿を消してしまった。

非常に興味ある後日談を田中教授は岩波書店の「図書」(1982年6月号 p20)で伝えている。田中教授は「『ことばと国家』に対して、文学作品を理屈をつけて深読みするものではないという批判があった」と述べているが、それよりも興味があるのは、前述のように、この「最期の授業」で矛盾しているとされて、日本でも既に昭和初期の中学教科書で行われた文の修正が、実はフランスでも行われていることが明らかになったことである。『ことばと国家』では「ドイツ人たちにこう言われたらどうするんだ。君たちはフランス人だと言いはっていた。だのに君たちの言葉を話すことも書くこともできないではないかと」(p.125) というふうにアメル先生の言葉を引用しているが、この下線部は「フランス語原文では lirer (読む) となっているので、間違っている」、との指摘が、ある読者から教授にあった。

読む力は人間が長じて二次的に与えられる能力、これに対して話す力は誰でもできる本源的は能動的な行為。母語であるかどうかの決め手は、ある言語=方言をよどみなく話せるかどうかである。だからドーデが「読む」という表現をしているならば、いよいよドーデの文章は奇妙になってくる。

ところが、田中教授が調べた限り parler となっている。1936年以来続く岩波文庫は「話す」となっており、多くの書物は「話す」であった。そこで田中教授が手紙の主に問い合わせると、彼の持っている本 Livre de pochet（1980年）では、たしかに lirer となっていた。田中教授は朝日新聞の夕刊版（1982. 4. 8）にこの「最期の授業」の改変の事情を教えてほしいと訴えた（教材としての「最期の授業」）が、有力な情報はなかったようである。これはどう考えるべきか。やはり当時のアルザスの状況から見て、またアメル先生、これも Hamel とアルザス的＝ドイツ的名前を採用して、非フランス的雰囲気をだしているが、アメル先生の言葉を「話す」とすることの無理を校正者（？）が感じて訂正したのかもしれない。田中教授は「つじつまあわせ」と断じているが、それほど無理をした作品であったわけである。

## 参　考　文　献

主要な物だけあげておく。本稿は2001年10月17日に行われた少数民族研究会第１回研究会の口頭発表に手を加えたので、細かい引用箇所は明示しなかった。ただ原稿に手を入れる段階で参照した場合のみ引用箇所を明示して置いた。

田中　克彦：『ことばと国家』（岩波新書）
府川源一郎：『消えた「最期の授業」』（大修館書店）
フレデリック・オッフェ：『アルザス文化論』（みすず書房）
フィリップス：『アルザスの言語戦争』（白水社）
中本真生子：アルザスと国民国家（思想№887）